



営農情報

「あまおう」6月の管理

第108号 令和3年6月1日

南筑後・久留米普及指導センター
福岡大城農業協同組合

10a 当たり収量 5t 以上を目指しましょう

令和2年産の生産経過

<育苗期>

- ・育苗期前半でチビクロバネキノコバエが多発し、苗に大きな被害を与えた。
- ・梅雨時の豪雨で浸冠水した育苗床では、炭そ病が多発した。
- ・梅雨明けが遅く日照不足気味に生育したため、苗の充実不足が見られた。
- ・早期作型では、一部で花芽分化がバラついたが、普通作型では順調に分化した。

<本田>

- ・定植後の生育は、降水量が少なく、気温も低く推移したため、平年より4～5日遅れとなった。
- ・出荷始めは令和元年産より遅い11月10日、2番果房の出荷開始は1月中旬で、ピークは2月中旬と令和元年産より早かった(図1)。
- ・ハダニ類は、ビニル被覆後から急激に増加し、春先まで発生が続いた。また、うどんこ病の発生が平年より多く、春先に多発したほ場が見られた。

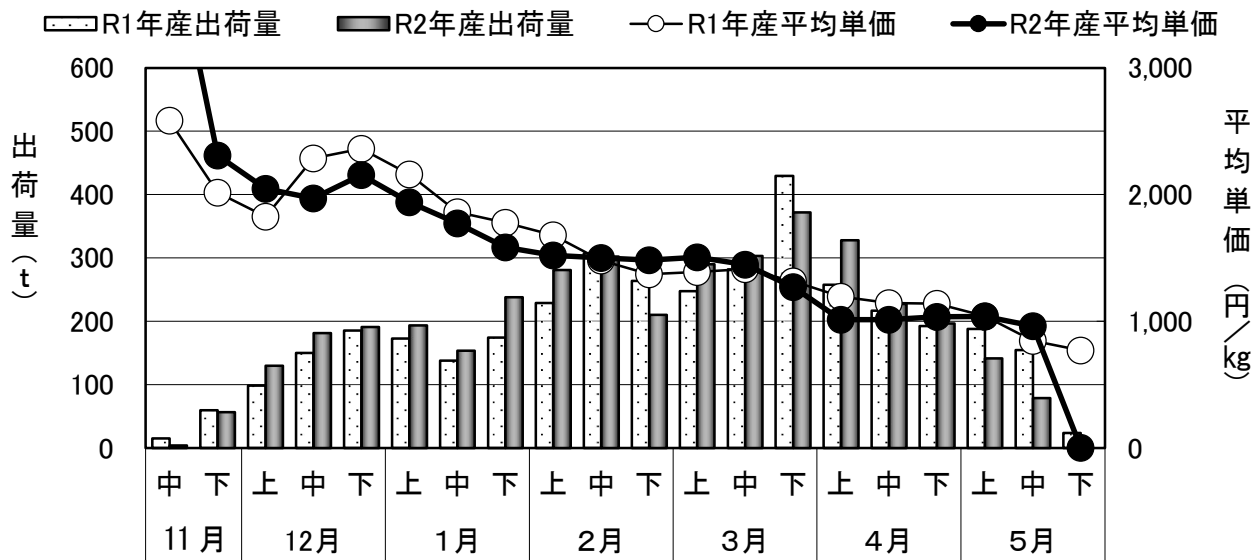


図1 J A福岡大城のイチゴ出荷量と平均単価の推移

(J A全農ふくれんデータ)

今後の管理

〈育苗目標〉

- **クラウン径8～10mm以上の良苗づくり**（収量確保）
- **作型に合わせた苗づくり**（まず、作型を決めましょう）
- **病害虫のない苗づくり**（炭そ病、ハダニ類を本ほに持ち込まない）

今年は平年と比べて入梅が20日早く、炭そ病の早期発病と発生拡大が懸念されます。降雨前後の予防散布を基本に、罹病株の早期発見・除去など、炭そ病対策を徹底して下さい。また、苗を廃棄した場合にも、定植株が不足しないよう例年よりも苗を多めに準備してください。

今年はハダニ類やアブラムシの発生が多く、うどんこ病の発生も見られます。適期防除に努めましょう。

採苗

降雨後の作業は避け、予防散布を行った後、親株から切り離しましょう！

【さしポット】 《目標鉢上げ時期》

8月処理開始の株冷・夜冷	⇒	6月10日まで
9月処理開始の株冷・夜冷 普通ポット	⇒	6月15日まで

- 本葉2～3枚で、3～5cm発根した苗（それ以上伸びていれば切る）を用いる。
- ワラ被覆床では、乾燥している場合には、採苗の1週間前からワラにかん水して子苗の発根を促進する。
- 活着を良くするため、鉢上げ前日に培土を十分湿らせておく。
- 極端な浅植えや深植えはしない。
- 鉢上げ後、晴天が続くことが予測される場合は、7日程度、黒寒冷紗（610番）等で遮光して乾燥を防止する。
- 晴天日が続く場合は、活着するまで葉水程度のかん水を1日に数回行う。
- 炭そ病対策として、採苗は雨の日を避け、気温の低い早朝に行う。
- 採苗後は苗が乾燥しないよう日陰に保管し、できる限り早く鉢上げする。
- 採苗当日に鉢上げできない場合は、苗が乾燥しないように湿らせた新聞紙に包み、2～3℃の予冷庫内で保存する。（保存期間は3日間まで）

【すけポット】 《目標切り離し時期 6月中旬》

- 降雨などで硬くなった培土は、根づき（根の伸長）が悪いので、培土をほぐす。
- 鉢受け期間中は、炭そ病の定期的な防除を行う（特に、鉢受け作業後）。
- 培土が乾燥すると根の伸長が悪くなるので、乾燥している場合はかん水を行う。
- 必要数の子苗を受け終わったら、ランナーの先端を切除する。また、子苗の徒長防止と病害虫発生防止のため、親株の全葉摘除と直後の防除を行う。

- 子苗の切り離しは、最終鉢受け後10～15日目頃（根づいた頃）を目安に行う。ただし、雨天時や苗が濡れている状態での切り離しは絶対に行わない。

切り離し後の育苗管理

【 肥培管理 】

炭そ病対策として、**窒素過多にならない**管理を徹底しましょう。

- 活着したら、追肥（置き肥）を開始する（例：花むすめで1～2粒/ポット）
- 活着後、2回程度液肥を施用する（例：OK-F-1で1,000～1,500倍）。
- 軟弱徒長させないため、梅雨時期は肥料を効かせすぎない。
- 肥料切れする期間がないように、液肥で肥効を調節する。
- ロング肥料を使用する場合は、作型により肥料の種類を変える

表1 「花むすめ」を利用した施肥事例

対象作型	置き肥（花むすめ）			最終追肥 （液肥かん注）
	1回目 （6/下）	2回目 （7/中）	3回目 （8/上）	
株冷・夜冷 （8月に低温処理 開始作型）	1～2粒	1粒	—	Ⅲ型：8月 5日 Ⅳ型：8月10日 Ⅴ型：8月15日
普通ポット等 （9月に低温処理 開始作型）	1～2粒	1粒	1粒	9月初

表2 「エコロング」を利用した施肥事例

作型	肥料の種類	施用量/株	施肥体系		
株冷	エコロングトータル 391-40 （40日タイプ）	1～1.5g （培土に より調整）	サ シ	エコロング	花むすめ(1粒)
			（鉢上げ日）	施用日	施用日
			6月 5日	6月10日	7月20日頃
			6月10日	6月15日	7月25日頃
普通	エコロングトータル 391-70 （70日タイプ）	1.5g/株	サ シ	エコロング	追 肥
			（鉢上げ日）	施用日	
			6月15日	6月20日	肥料切れした 場合は「花むす め」を追加、もし くは、「OKF-1」 を 800 ～ 1,000 倍でかん 注（9 月上旬ま で）

- 「エコロング」は、サシ（鉢上げ）5日後を目安に施用する。
- 株冷作型では、「花むすめ」をエコロング施用40日後を目安に施用する。
- 肥料切れして液肥をかん注する場合には、表1の最終追肥日に従う。

【 かん水 】

- 活着までは、1日に5～6回かん水する。
- 活着後は、午前中主体のかん水とし、徒長防止と炭そ病予防のため、長時間濡れ状態にしない。
特に、夕方のかん水が必要な場合は葉水程度とする。
- 過湿にならないよう、鉢土の乾燥状態（根の状態）を常に観察してかん水を行う。
- 愛ポットなどの小型ポットや棚式育苗は乾きやすいので、こまめにかん水する。

【 葉かぎ 】

- 葉かぎは、活着後、根が十分に回ってから開始する。
- 葉数3.5枚を確保するように、下葉かぎを行う。
- 雨の日は絶対にしない。
- 葉かぎ後は、必ず、当日もしくは翌日に炭そ病の防除を行う。

【 病虫害防除 】

病虫害に対しては、予防が重要です。育苗期の①定期薬剤散布、②観察 に努め多発を防ぎましょ
う。

<炭そ病>

炭そ病菌および疫病菌は、雨やかん水で保菌株から周辺株に飛散し、感染・発病する。

- 定期的な防除、降雨前後の防除及び葉かぎ後の防除を徹底する。
- 発病株と周辺の株は、ほ場の外へ持ち出し処分する（発病株を中心に1m範囲）。
- 苗を持ち出した場所には他の苗を持ってこない
- ポット間隔をできる限り広くとる（18cmの間隔は確保する）。
- 育苗床の排水対策を講じておく。
- 育苗中の雨よけは、病原菌の飛散防止に効果が高い（特に梅雨期）。

※詳細はトピックスを参考にしてください

<疫病>

疫病菌は、梅雨期～9月の高温多湿期になると水の移動とともに広く伝染する。また、大雨で苗の浸水により病原菌が運ばれたり、水たまりの菌がかん水・降雨により飛散し伝染する。

土壌伝染性の病害であり、前年発病したほ場では、再発の恐れがある。

- 定期的な防除、降雨前後の防除及び葉かぎ後の防除を徹底する。（かん注剤の効果が高い）
- 発病株と周辺の株は、ほ場の外へ持ち出し処分する。
- 苗を持ち出した場所には他の苗を持ってこない
- 育苗床の排水対策を講じておく。
- 前年度発生した本田では、必ず土壌消毒を行う。

<うどんこ病>

うどんこ病の予防には、病斑のある葉を冷蔵庫及び本田に持ち込まないことが重要です。
うどんこ病の症状が進展する梅雨期を中心にしっかりと薬剤防除を行う。

<ハダニ類>

ハダニ類は外からの飛び込みはほとんどなく、イチゴの栽培サイクルの中で世代交代を繰り返す。そのため、いずれかのステージ（親株・育苗・本ぼ）でハダニ類発生を断ち切ることがポイントとなる。

育苗期は葉数が少なく薬液がかかりやすいので、育苗期での防除を徹底し、本ぼに持ち込まない。

<チビクロバネキノコバエ>

成虫は有機物に誘引されるため、ハウス周辺に長期間堆肥を堆積すると、本虫が誘引、産卵して増殖し、発生源となる。そのため、堆肥を堆積する場合は、ビニルをベタ張りする等して、本虫が産卵できないようにする。また、チビクロバネキノコバエの成虫は育苗期から発生が認められるため、育苗期から薬剤防除を実施する。

本田の土づくり・土壌消毒

●有機物の施用

- ▶ イチゴ栽培で消耗する土壌有機物は、堆肥約2 t / 10 aに相当する。
- ▶ 稲ワラ・麦ワラ・家畜ふん堆肥等の有機物は、6月前半に投入して土壌混和し、十分な雨にあてる。(分解促進、塩類溶脱のため)

●土壌消毒

- ▶ 薬剤による消毒または太陽熱消毒のいずれかを実施する。(土壌病害虫が発生した場合は、太陽熱消毒+薬剤消毒が望ましい)

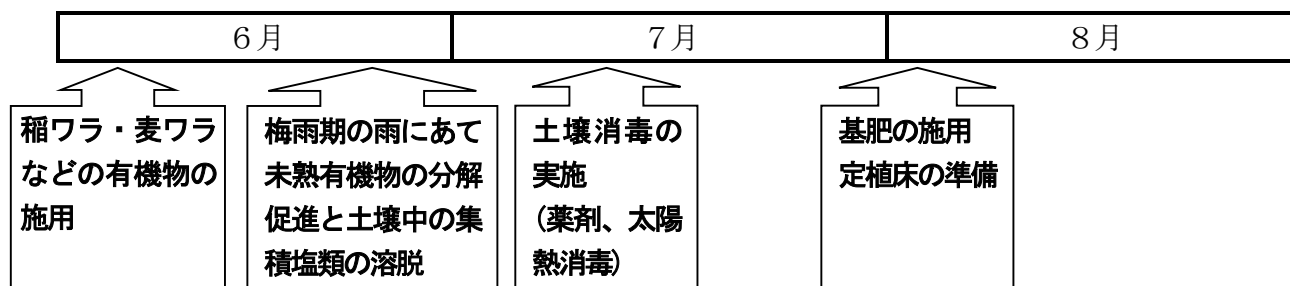


図2 土づくり・土壌消毒スケジュール

トピックス「耕種的防除と薬剤防除を組み合わせる炭そ病を防ぐ」

令和3年は、九州北部で5月15日に梅雨入りが発表され、平年と比較して20日早い梅雨入りとなりました。このため、炭そ病の多発が懸念されます。下記を参考に、健苗確保に向けて炭そ病防除に努めましょう。

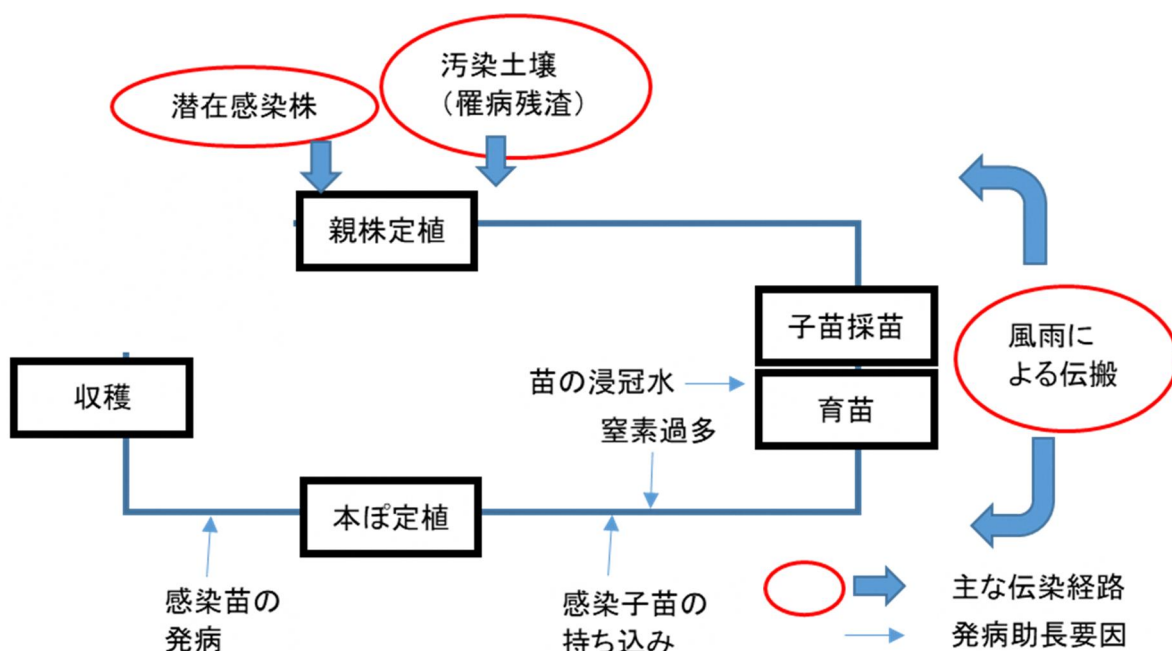


図3 イチゴ炭そ病の伝染経路と発病助長要因

図3に炭そ病の伝染経路と発病助長要因を示しています。炭そ病の防除対策としては、図3に示す伝染環を遮断することを目的とした耕種的防除（表3）と薬剤防除を組み合わせた総合防除が有効です。

表3 炭そ病の発病助長要因と耕種的防除対策

作業	発病助長要因	耕種的防除対策
親株定植	潜在感染株の持ち込み	無病親株の確保 (親株の更新、秋冬ランナーの使用)
	罹病残渣による土壌汚染	無病地への植え付け
子苗採苗	風雨による伝搬	親株からの早期切り離し 雨よけ採苗・育苗
育苗	感染子苗の持ち込み	発病子苗・周辺子苗の除去 (1メートルを目安)
	苗の浸冠水	棚育苗 排水促進(地床)
	窒素過多	適切な肥培管理
定植	感染子苗の持ち込み	定植後の防除の徹底

～「慣れ」と「油断」が事故を招きます～

”安全”な農作業と農薬使用を徹底しましょう！